慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『慈悲道場目連報本懺法』と『仏説目連救母経』について(上)
Sub Title	"Cibei daochang Mulian baoben chanfa" and "Foshuo Mulian jiumujing"
Author	渋谷, 誉一郎(Shibuya, Yoichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2002
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.83, (2002. 12) ,p.61- 76
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00830001-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『慈悲道場目連報本懺法』と『仏説目連救母経』について（上）

渋谷　誉一郎

はじめに

目連救母説話の中国文学における展開は、盂蘭盆会の縁起として『盂蘭盆経』に説かれたのに端を発して、唐五代の変文に代表される講唱文学に発展し、その後も宗教的性格を色濃く残しながら明清の宝巻へと変遷してゆく一方、宋代には芝居に登場し、元明を経ていわゆる「目連戯」に結実するというのが、ごく大まかな状況として捉えられるであろう。さて、講唱文学に視点を絞れば、唐五代には敦煌文献に含まれる作品資料の存在によってある程度その実態を窺いうるが、これを継ぐと目される宝巻は明代の『目連救母出離地獄生天宝巻』を待たねばならない。その間の欠を補うのが、元刊『仏説目連救母経』（以下『救母経』と略称）である。『救母経』は経典であるから講唱文学の直接資料とはならないが、説話プロットの流伝状況や文体に遺された口承の特徴を探る資料として重要である。現存する『救母経』は日本と韓国とに伝存し、中国では逸書とされてきた。[1] ところが、中国にも伝承せられていた可能性がある。本稿標題に

掲げた『慈悲道場目連報本懺法』（本文首題。封面題は『慈悲目連宝懺』、以下封面題を用いて『目連宝懺』と略称する）に用いられている経典は、内容、文体ともに『救母経』とほぼ等しいと認められるからである。

『目連宝懺』は、筆者が二〇〇一年度在外研究により中国に滞在した際、浙江省天台山国清寺の宝物流通処において、たまたま購入した懺法書である。国清寺においても仏書を発行しているが、本書には奥書がなく、体裁から見て国清寺の発行ではない。造本はごく簡素であり、原本の形態は判然としないが、本書は複写製本である。筆者は国清寺だけでなく、浙江省普陀山や四川省成都等の寺院においても同系統の仏書を多数見かけている。したがって、現在の中国では広範囲に亘り、相当量が流通していると思われる。(2)

本稿では『目連宝懺』所収の目連説話を中心として、『救母経』との比較を通して両書の関係を考察し、また『目連宝懺』の中国講唱文学における意義について私見を述べてみたい。

一、『目連宝懺』所見「目連救母説話」梗概

本章では『目連宝懺』に含まれる目連説話の梗概を示す。懺法は一般に仏教儀礼と説教とから構成されるが、目連説話は巻中第二段に引かれる経文である。巻下には『父母恩重経』系統の経典が引かれており、この二つの経典が懺法の中心となっている。ここでは巻中第二段の序に相当する部分のあとに引かれる目連説話を取り上げる。原典を引用した場合は読み下し文を「　」で示し、また便宜上プロットごとに番号を付した。

「慈悲道場目連報本懺法巻中」

第一段、略。

第二段

「諸仏に礼し已り、衆等生生世世、常に仏会に値り、道場を見るを得、常に諸仏の教導開示を蒙り、常に正法を聞き、邪教に入らず。今日の道場は、同業の大衆と、善を作さば善き報いを失せず、将来の世に、自ずから其の楽を受けん。悪を爲さば悪の報いを失せず、将来の世に自から其の殃を受けん。若し未だ善果を得ざれば、先ず孝順を行い、聖賢を感動せしめ、無量の福を獲るべし。是の故に経に言わく」（以下、目連故事に入る）。

（一）昔、王舎城に傅相という長者がおり、家はたいそう富み、人柄は穏やかで、常に六波羅密の修行に勤めていたが、ある日突然、病に罹り亡くなる。

（二）傅相には羅卜という息子がおり、父の亡骸を山所に葬る。

（三）三年の喪が開けると、羅卜は母に、父の在世には富んでいたが、いまでは蔵が空になりそうなので、外国に商売に出かけることを告げる。母は下僕の益利に（財産を）持って来させると三千貫あった。それを三分し、一を家のために遺し、一を父のために仏と僧侶に斎を設けるのに遺し、一を商売のために外国へ持って行くことにした。

（四）母は息子が旅立つと、奴婢にもしも僧侶がやって来たら棒で追い払い、斎のための銭で豚や羊等を買わせ、肥らせるよう命じた。柱から懸けて屠り、打ち殺される豚の悲しげな声が響いた。鬼神を祀祭して、諸々の快楽をなす。

（五）羅卜は一千貫の資金を三年で三千貫を儲けて帰国すると、城外四十里で休み、益利を遣わせて母に伝えた。もし善根を積んだならば、この金をもって母に供養し、悪行の因縁を積んだならば、母のために懺悔しよう、と。

（六）奴婢の金支は益利の姿を認めると、阿婆に羅卜の帰国を伝える。阿婆は門を閉ざし、蔵から幢幡を取り出し、後

園に斎所をしつらえると、益利に告げた。羅トの不在中には毎日斎を設け、後園にはまだ片づけていない食器や香華が散らかっている、と。

（七）益利は羅トに阿婆が毎日斎を設けており、その証しに僧たちに振る舞ったときの食器やら幢幡が散らかっているさまを伝える。羅トはそれを聞いて母に向けて礼拝する。その時、近隣の人たちが羅トの帰国を聞きつけ、出迎えに来た。彼らの口から不在中の母の悪行をつぶさに聞いた羅トは身を投げ出して悶絶して意識を失い、しばらくして息を吹き返した。

（八）羅トを迎えに来た母は、倒れているさまを見て「もしも僧に斎を設けていなければ、家に帰れば病に罹り、阿鼻地獄へ堕ちよう」という誓いを立てる。これを耳にした羅トは起きあがり家に帰るが、母は突然重い病に罹り、七日を経ずして亡くなった。

（九）羅トは母を山所に葬り、庵を結んで三年の喪に服した。土を担いで陵墓を造り、仏像を供奉し、経典を転誦すると、鹿が現れ、白鶴が吉祥を呈し、百鳥は土を銜えて墓造りを助けた。

第三段

（一〇）喪が開けると、羅トは耆闍崛山に世尊を訪ねて出家する。仏は出家して八万四千の浮図宝塔を建立すれば、現世の父母は楽福し、先代の霊は浄土に生まれると述べ、阿難に羅トを剃髪させ、摩頂授記を授け、名を大目犍連と改めた。仏は耆闍崛山の宝鉢羅庵で修行することを勧める。

（一一）目連は修行して仏十弟子の神通第一となる。禅定に入り三十三天を観想すると、天宮に父を見出すが、母は見つからない。仏の許に帰り訊ねると、母は在世に三宝を信ぜず、慳貪で悪行を重ねたため、地獄に堕ちたと教えら

れる。目連は身を投げ出して悲啼号泣すると、母を救済せんと地獄へ旅立つ。

（一二）以下、目連の地獄巡りとなる。次章で述べるように、このプロットはバリエーションが多彩である。別に論ずるのが適当と判断し、ここでは罪と罰を簡略に紹介するに止める。①剉碓地獄、罪人は碓臼に入れられ身と首を砕かれる。衆生を押し切り鍋で煮て食らった罪。②剣樹地獄、身は剣の木にあり、百骨零落し、千筋砕断せらる。因果を信ぜず、衆生を殺して串焼きにして食した罪。③刀山地獄、刀の山を登り、剣刃を攀り、四体が裂け砕ける。刀で家畜を屠り、煮焼きして食した罪。④石磑地獄、二つの大石で叩かれ、骨肉は粉砕す。虫を焼いたり踏んだり湯を注いだりして殺した罪。⑤鑊湯地獄、鑊湯で煮られて身体は爛れ、皮骨は脱落す。三宝を信ぜず、生き物を殺し湯で毛を削ぎ鑊で煮て食した罪。⑥灰河地獄、罪人は逃げまどい、身を焦爛す。四方の門が開いて駆け寄ると門は閉ざされる。富貴人を凌ぎ、鶏子を焼き食した罪。⑦火盆地獄、頭に火盆を戴き、身体の節々に火が起こり、頭皮は焦爛して苦しみもがく。公威に頼って小民に詐欺を働き財産を勒取した罪。

第四段

⑧銅柱地獄、柱に縛られ、身体を焼かれ、鉄丸を呑まされる。人を柱に縛りつけて鞭打った罪。⑨鋸解地獄、板に縛りつけられ鋸で切り刻まれる。活きながらに猪羊の腹を割き焼いて食した罪。⑩鉄磨地獄、挽臼で粉々に砕かれて死ぬと、業風に吹かれて生き返り、再び責めを受ける。⑪寒氷地獄、裸体で凍え呻き、皮膚は裂ける。他人の衣服を剥奪し凍死させた罪。⑫黒暗地獄、終年黒闇の中におり、逃げ出す門はない。暗闇で諸々の生命を殺し、官税をごまかし素知らぬ振りをした罪。⑬耕舌地獄、牛頭獄卒が鉄鈎で罪人の口を割いて舌を抜き出し牛で耕やす。妄言綺語、悪口両舌を弄して諍いを招いた罪。⑭斬剉地獄、首を斬り落とされると、業風が吹いて生き返り、また斬

られる。前世は斬首執行人で、喜んで人を殺した罪。⑮餓鬼地獄、餓鬼どもの頭は籮の如く肥大し、腹は甕のように扁平、喉は針のように細く、歩くごとに骨のきしむ音がする。口から炎を吐き、醜悪この上ない。前世に慳貪で門を閉ざして独り食らい、父母を飢餓せしめ、三宝を敬わなかった罪。

（一三）　さらに進んで行くと一大地獄に着く。高く厚い塀と鉄網に囲まれ、門前には四匹の銅狗が口から火を吐き、火炎が空を焦がす。目連は門に向かって声を掛けるが、応えはなく、やむなく仏の許に帰る。仏は目連に袈裟と錫杖と鉢盂とを与え、獄門で錫杖を三度振るえば門は自ずと開くことを教示する。

（一四）　目連は仏勅を奉じて獄門に戻り、錫杖を振るって門を開ける。罪人は業風に吹かれ、倒懸せられて下ってくるので、獄門は長きにわたって開くことがなかった。目連は、釈迦の教えに従って母を捜しにやって来たもので、母は王舎城の傅相の妻の青提夫人、姓は劉、第は四と、獄主に告げる。

（一五）　獄主は青提夫人を呼び、息子の大目犍連と称する仏弟子が来ており、獄から出てくるよう告げる。青提は別処に移されるのを恐れて応えない。再び呼び出すと、出家した息子はおらず、名も違うという。獄主はその旨を目連に告げると、目連は父母の在世には名を羅卜といい、母が亡くなってから出家し、大目犍連に改めたと述べる。それを聞いて母は目連を息子と認める。

第五段

（一六）　目連は生前の母が香華飲食を仏に供し、僧に斎する善功を積んでいたのに、地獄に堕ちるとは思いもよらなかった。母は在世には三宝を敬わず、斎を設けたと詐り、悪業を重ねたので地獄に堕ち、飢えれば鉄丸を呑み、渇すれば熔銅を呑む、無量の苦しみを受けている惨状を訴える。

（一七）母は獄卒によって獄へ連れ戻されそうになり、何とか方策を講じて地獄から救い出すよう懇願する。目連は左足を門内に右足を門外にして、頭を柱に打ちつけ血まみれになりながら、母の代わりに罪を受けると申し出るも、許されない。獄主に母を救いたければ仏にすがるほかないと教えられる。

（一八）仏は自らが救済に乗り出し、叶わぬ時には母に代わって罪苦を受けることを誓う。諸々の徒衆、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天竜八部を率いて、眉間より五色の毫光を放ち地獄を照破すると、刀山剣樹は宝林となり、鉄床は宝座となり、鑊湯は蓮池と化した。閻羅天子はこれを讃え礼拝し、獄卒に勅して罪人をみな解き放ち、善道に托生せしめた。

（一九）母は業障が尽きていないので、黒暗地獄に生まれたことを仏から聞くと、目連は一鉢の飯を持って母を訪ねた。母は貪心を改めず、左手に鉢を受けとり右手で人を遮り、飯を口に入れようとすると、飯は火炭に化した。諸々の菩薩に大乗経典に転読してもらい、母を獄から逃れさせると、母は餓鬼道に生まれた。目連は母に恒河の水を飲ませて腹を洗おうと願うが、水を飲めば変じて猛火となり、腹中に流れ込んで腹を爛れさせると教えられ、仏に餓鬼の身を脱する手立てを求める。

（二〇）目連一人の力では如何ともしがたい。十方の衆僧、威神の力に頼らなければならぬとして、仏は説く。七月十五日、仏歓喜の日、僧の自恣の時に、現在の父母と七世の父母のために、香油錠燭、百味珍饈等々を盂蘭盆におき、四十九灯を点じ、神幡を造立して、三宝を供養し、衆僧に供す。さすれば現世の父母と六親眷属は三途の苦中より解脱を得、現世の父母は福楽なること百年、七世の父母は天に生まれ楽を受けよう、と。

（二一）仏は十方の衆僧に向けて、受食の時、仏前にて施主の過去現在父母のために心明禅定し、苦を離れ楽を得るを

呪願すべし、と勅を発する。目連の母は飢餓の苦を脱して、忉利天に托生し、諸々の快楽を受けることとなった。

(二二) 目連は母のみならず、現在未来の弟子が盂蘭盆の供養を修め、慈親を報度できるかどうか仏に問う。仏は説く。七月十五日、仏歓喜の日、僧自恣の時に、百味飲食、雑果珍饈を浄供営修し、盂蘭盆の中に安じ、仏及び僧に施し、現在の父母をして寿命を百歳に、過去七世の父母をして苦を離れ、人天の中に生まれ、勝妙の楽を受けしめん。仏弟子及び末世の衆生の孝順を修めんとする者は、みな倣うべし、と。時に目連尊者、四輩の弟子は歓喜奉行す。

第六段

(二三) 盂蘭盆法会の形式、功徳を説く。略。

二、『救母経』との比較

右の梗概によって『目連宝懺』と『救母経』とにおける目連故事の内容はほぼ一致することが明らかとなったであろう。本章では両書の内容および文体等について考察を加えてみたい。

(1) プロットの比較

目連説話の内容について、目連が遍歴する地獄が増加されているのを除けば、『目連宝懺』のみに存在し、『救母経』に現れないプロットはないと言ってよい。地獄遍歴の相違については、石破洋氏の「地獄めぐりの部分や、母を阿鼻・黒闇・餓鬼・狗・女人・忉利天と次々に救済するところは、説話としては適当にアレンジ出来るし、また実際にアレン

ジされている[3]」という指摘のごとく、目連説話のみならず、地獄巡り説話にまで視野を広げれば、実にさまざまな展開を示しているのは周知のことである。地獄巡りについては稿を改めて考察することとし、ここではそれ以外の『救母経』のみに現れ、『目連宝懺』には見られないプロットを抽出して検討を加える。『宝懺』の該当箇所を梗概の番号で表し、原典引用には宮次男公刊『救母経』の頁数を付した[4]。

①『宝懺』(一一)では、羅卜は母の喪が開けると出家し、名を大目犍連と改め、仏の勧めによって耆闍崛山の宝鉢羅庵で修行を開始する。『救母経』では目連と改名したあとに、宝塔の功徳と出家の功徳とを比べて説く一節があり、さらに耆闍崛山の斎食の様子を仏の口を借りて述べるくだりが挿入されている。

目連白佛言、世尊、寶塔浩大、功德如何。世尊答言、目連、寶塔高大、簷簷相接、徹至梵天。百年之後、雨漏佛面、當來獲罪。出家功德、是金剛不壞之身。……目連啓世尊、山中有何粮食、堪得學道。佛言目連、山中唯有虎狼禽獸、每到齋時、口嚼香花、自來供養。(二二上)

②『宝懺』(一五)では、目連は阿鼻地獄において母を探し出すが、母は目連という出家した息子はいないと面会を拒否する。目連は幼名を羅卜と称し、父母が身罷った後に出家し、大目犍連と改名したことを獄主に伝える。『救母経』では、それを聞いた獄主は、

獄主問師、今日尋得娘見、將何報答、弟子之恩。目連答言、今日得見阿娘、請諸菩薩、轉大乘經典、報答獄主之恩。(二三上)

と、母を探しあてたならば、何を以て報いるかと問い、それに対して目連は諸菩薩に大乘経典を転読してもらい、獄

主の恩に報いると答える。

③『宝儀』(二〇)(二一)において、餓鬼地獄を脱することのできた青提は盂蘭盆の法要によって忉利天に生まれることになっているが、『救母経』では、母は餓鬼地獄を脱したあと、王舎城で雌狗に生まれる。目連は母を探し出し、地獄の苦しみと比べて如何か訊ねると、母は地獄よりは狗となって人の不浄を食うほうがましだと答える。

目連告佛、我母托生何道。佛言目連、雖離餓鬼、托生今在王舎城中、化爲母狗。目連聞是語已、挺鉢往王舎城中、呼覓其狗。狗見目連、走出抱腰懊惱。我是師母、師是我兒。目連問母、今作狗身之苦、何如地獄之苦。狗語目連、我乍可長劫作狗身、喫人不淨、我怕聞地獄之聲。(二四上)

④目連は世尊に狗身から脱する手立てを問うと、盂蘭盆斎を設けて功徳を積むことを教示される。盂蘭盆斎を設けることは『目連儀法』と同じであるが、七月一五日である理由について、『救母経』では『目連宝儀』と異なるやりとりがかわされ、さらに盂蘭盆を楊栢枝葉で造ることが記されている。

世尊答言、目連、取七月半日、造取盂蘭盆齋、得娘離狗身。目連問世尊、何故不取十三十四、要取七月十五日。世尊答言、目連、七月十五日、是衆僧解夏之日、歡喜俱會一處。用□(ママ)汝母當生淨土。目連即依佛勅、市買楊葉栢枝、造得盂蘭盆齋。(二四上)

ここではまず③に注目したい。さきの石破氏の指摘のごとく、地獄巡りと同様に母の救済も説話としてアレンジしうるプロットと言える。しかしながら、第一に『目連宝儀』では遍歴する地獄は『救母経』より増加し、[5] それ以外のプロットも基本的には『救母経』と等しいなかで③のみが見られない点、第二に『救母経』より先に成立し、この部分を存

している『目連縁起』『大目建連冥間救母変文』や「目連戯」（鄭之珍本）にはすべてこのプロットが含まれている点に照らせば、『目連宝懺』における欠落はきわめて重要な特徴である。この欠落は『目連宝懺』が『救母経』に基づいて改編されたことを示唆するものである。すなわち、③は削除されたと考えられるであろう。

①②④については、プロットとしてよりディテールとして扱った方が妥当かも知れない。次節以降で考察するように、文体や修辞を比較すると『救母経』は『目連宝懺』より叙述が豊富であり、それが饒舌あるいは冗漫に流れる傾向が認められる。それに対して『目連宝懺』は反復表現等、口誦の影響を留めながら、比較的均整のとれた体裁となっている。こうした相違はプロットやディテールの処理にも共通すると考えたい。すなわち、『目連宝懺』は内容においても整合性を重視し、説話のテーマをより明確にするために①②④を取り入れなかったか、あるいは削除されたのであろう。

（待続）

注

（1）目連説話の展開および『救母経』については以下の論考を参照。宮次男「目連救母説話とその絵画―目連救母経絵の出現に因んで」『美術研究』、吉川弘文館、六七年、第五冊所収。石破洋「目連説話における目連救母経の意義について」『金沢大学大学院文学研究科研究論集』創刊号、七五年所収。同「わが国における目連救母説話の変容」『鳥取県立八頭高等学校国語科研究紀要』第一号、七五年所収。同「中国における目連救母説話の変容」『鳥取県立八頭高等学校国語科研究紀要』第二号、七六年所収。上三篇はいま、同『地獄絵と文学―絵解きの世界』教育出版センター、九二年所収。黒田彰「在外『目連経』資料」『国文学』五八号、八一年所収。同「三国伝記と目連経―変文と説話（二）」『千里

山文学論集』二八号、八三年所収。上二篇はいま、同『中世説話の文学史的環境』和泉書院、八七年所収。また、『救母経』は八九年に中国湖南省で開かれた「目連戯学術討論会」において吉川良和氏が紹介されてから中国でも注目を集めるようになった。氏の討論会提出論文は「關於日本發現的元刊『佛説目連救母經』、附『佛説目連救母經』」『戯曲研究』第三七輯「目連戯研究専輯」、九一年所収。同氏には目連説話の歴史的展開を論じた「目連救母芸能初探」『人文学研究所報』神奈川大学人文学研究所、二二号、八九年、がある。中国での『救母経』についての研究状況は、朱恒夫『目連戯研究』南京大学出版社、九三年。劉禎『中国民間目連文化』巴蜀書社、九七年等を参照。

(2) 『目連宝懺』は他に二本を入手している。一本は四川省成都の昭覚寺で購入。表紙に「温州蒼南廣惠寺流通處」とある。もう一本は慶大中文院生の植松公彦君が、ほぼ同時期にやはり中国で入手したものの複写で、購入地は四川省大足右窟とのことである。いずれも本文の体例は同じだが、若干文字に異同が認められる。本書の出自と併せて詳細は待考としておく。目連関連の懺法書に『慈悲蘭盆目連懺法道場』(中国国家図書館蔵)があるが、目連説話の内容は本書と異なる。ミシェル・スワミエ「地蔵の獅子について」『東方宗教』一九、六七年所収に、地蔵と目連の関係を示す例として「慈悲蘭盆目連懺(一三五一年序、一六七一年刊)」の記載を引くのはおそらくこの書であると思われるが未詳。中国では『目連宝懺』の他に三一種の懺法書を入手している。その大半は同じ装幀をもち、いずれも封面題を『慈悲△△宝懺』と称する。このことはこれらの懺法書が寺院なり佛教組織なりによって一定の方向性をもって編纂されたことを示している。その一つの拠点が温州廣惠寺と考えられる。該寺については未詳。三一種について略称を記しておく。血湖宝懺、薬師宝懺(四種)、金剛宝懺(二種)、三昧水懺(三種)、地蔵浄土懺(三種)、地蔵宝懺、梁皇宝懺、八十八佛洪名宝懺、千手千眼懺法(二種)、解冤釋結宝懺、壽生宝懺、閻王妙懺、報恩宝懺、十王宝懺(二種)、華厳普賢行願法華三昧懺儀合刊、過去現在未来三千佛懺、大悲懺法、地蔵懺願儀、大般若懺法、血湖法懺(道教)、救苦法懺(道教)。

(3) 注(1)参照

(4) 注(1)参照。

(5) 『救母経』では剉碓、剣樹、石磑、餓鬼、灰河、鑊湯、火盆、阿鼻、黒暗の九地獄。『目連宝懺』は梗概に示した一五に阿鼻を加えた計一六地獄である。

附 「目連宝鑑」所収「目連説話」本文

【凡例】 原典に従って段に分けた。目連説話は第二段から第五段に引かれている。明らかな誤字は（ ）で訂正を示した。原典には句読が後から付されているが、明かな誤りは訂正した。用字は原典に従うのを原則としたが、通行字を用いている場合がある。

王舎城中、有一長者、名曰傅相、其家大富、象馬駝驢、遍滿山野、錦綺羅紈、珍寶滿藏、常行六度、不逆人情、忽病身亡。惟養一子、名曰羅卜。父既亡没、盡禮建送、葬於山所。三年服滿、遂啓阿娘、阿爺在日、錢財無數、而今庫藏、將欲空虛、意欲出外、經商買賣。娘即聽許、遣奴益利、運出錢財。有三千貫、分作三分、一分奉母、供給門戸、一分與娘、奉養三寶、爲父設齋、供佛飯僧、將自一分、往於他國、與(興)販經紀。阿娘待子去後、説向奴婢、若有師僧、來我門前、將棒打逐、以設齋錢、廣買牛羊、鷄豚鵝鴨、餧飼令肥、懸縛柱上、刺血淋盆、哀聲未絶、毛羽脱落、劈腹取心、祭諸鬼神、恣意作樂。羅卜去後、經商日久、將諸錢財、回歸本國、四十里外、城西安歇。先遣益利、歸家問母、若作善事、我將此錢、供奉阿娘、若作惡事、我將此錢、爲娘懺悔。益利奉命、遂先歸家。而婢金支、遙見益利、走報阿婆、郎君歸也。婆問金支、如何得知。金支答言、益利既歸、郎君必歸。婆遣金支、急且關門。我取幢幡、張施後堂、假設齋所、方可關(開)門、引益利進。語益利曰、汝與郎君、去作經商、我常在家、每設僧齋、汝若不信、後園佛堂、看我齋所、衆僧雖散、香煙雜亂、匙筋(筯)交横、尚收未了。益利歡喜、走報郎君、婆在家中、每設僧齋、我到家中、已見齋所、幡花雜亂、匙筋(筯)交横、尚收未了。羅卜聞此、心生歡喜、我當遙空、禮拜阿娘。時諸隣舍、鄉親眷屬、俱出城外、接見郎君、遙空禮拜、遂問郎君、前無三寶、後無四衆、禮拜何爲。羅卜答言、慚愧阿娘、在家敬佛、日設僧齋、我當禮謝。鄉親謂言、汝母從子、別家去後、凡見僧來、喚婢打逐、將汝齋錢、廣買牛羊、鵝鴨等畜、餧飼令肥、恣行殺害、祭祀鬼神、作諸快樂。羅卜聞此、身毛孔中、汗血迸流、悶絶在地、良久方甦。母見兒歸、亦出外接、見兒倒地、牽兒手曰、莫聽傍言、成人者少、敗人者多、聽我誓曰、從汝去後、若不爲汝、每設僧齋、今我歸家、隨即病死、入阿鼻獄。子見母誓、遂起歸家。娘忽感病、七日果死。羅卜送母、歸山入壙、結草爲庵、守母墳陵。三年苦行、擔土加墳、供奉佛像、轉誦經典、感鹿來現、白鶴呈祥、百鳥銜土、助加墳陵。

復次羅卜、三年孝滿、往耆闍崛山、禮世尊足、而白佛言、父母俱亡、心願出家、有何功德。佛言善哉、羅卜閻浮提人、若捨一男一女、一奴一婢、出家修道、勝造八萬四千、浮圖寶塔、現世父母、福樂百年、先代亡靈、當生淨土、何況自發、菩提道心。即令阿難、爲其剃髪。世尊即與、摩頂授記、改名大目犍連。復問世尊、令入何山學道。佛言、耆闍崛山、寶鉢羅庵、可以

修道。目連至彼、入定修慧、明心見性、十弟子中、神通第一、觀遊三十三天、生化樂天宮。惟見阿爺、受天福報、不見阿娘、生於何處。回問世尊、未審阿娘、今生何處。佛語目連、汝母在生、不信三寶、慳貪不捨、造諸重罪、如須彌山、死入地獄。目連聞此、擧身自撲、悲啼號泣、從地而起、遊諸地獄、尋救阿娘、首至剉碓地獄、見閻浮人、在碓臼中、身首摧碎、血肉狼籍(藉)、每日萬死萬生。目連哀問、此獄衆生、前作何罪、今受此苦。獄主答言、因前世時、坐(剉)切衆生、鍋中煎煮、男女親屬、聚頭共食、口唱甘美、今日果報、只得忍受。次復前行、遇一劍樹地獄、見諸罪人、身在劍樹、百骨零落、千觔碎斷。目連哀問、此獄衆生、前作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、不信因果、殺諸衆生、串炙皮肉、男女同食、肥甘口腹、今日果報、只得忍受。次復前行、見刀山地獄、利刀成行。有諸罪人、腳踏刀山、手攀劍刃、四體割碎、流血迸汗。目連哀問、此獄衆生、前作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、將刀割截、豬羊等畜、或炮或煮、食叫滋味、今日果報、只得忍受。次復前行、見一石磑地獄、兩塊大石、磑諸罪人、骨肉破碎、血流迸濺。目連哀問、此獄衆生、前作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、殺害蟲蟻、或燒或踏、或以湯澆、枉死無伸、今日果報、只得忍受。次復前行、見一鑊湯地獄、有諸衆生、在鑊湯中、波涛湧沸、煮爛其身、皮骨脫落、業風吹活、而復煮之、苦不可言。目連哀問、此獄衆生、前作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、不信三寶、故殺衆生、湯灌褪毛、滿鑊煎煮、食啖取樂、今日果報、只得忍受。次復前行、見一灰河地獄、其中罪人、奔波迸走、遍身焦爛、見四門開、走至復閉。目連哀問、此獄衆生、宿作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、富貴凌人、火炮鷄子、今日果報、只得忍受。又復前行、見一火盆地獄、有諸罪人、頭戴火盆、身上骨節、炎炎火起、頭皮焦爛、猖狂惶怖。目連悲問、此獄衆生、宿作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、假托公威、欺詐小民、以石壓頂、勒取錢財、惟知利己、不顧害他、今日果報、只得忍受。

目連又復前行、見一銅柱地獄、有諸罪人、縛在柱上、渾身焦爛、火燄騰起、更吞鐵丸、目連悲問、此獄衆生、宿作何罪、今受此苦。獄主答言、因前世時、縛人柱上、非法鞭打、苦痛難當、今日果報、只得忍受。次復前行、見一鋸解地獄、牛頭獄卒、將諸罪人、縛在版中、以鋸解之、苦痛難忍。目連悲問、此獄衆生、宿作何罪、今受此苦。獄主答言、因前世時、活把豬羊、劈腹破身、零炮碎炙、令口肥甜、恣意歡樂、今日果報、只得忍受。次復前行、見一鐵磨地獄、有諸罪人、盡被繩縛、叉入磨中、治令粉碎、業風吹活、還復磨之。目連悲問、此獄罪人、前作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、橫殺衆生、碎切皮肉、敲骨取髓、煎炒食啖、今日果報、只得忍受。次復前行、見一寒氷地獄、有諸罪人、裸凍呻吟、皮膚拆裂、苦痛難忍。目連悲問、此獄罪人、宿作何罪、今受此苦。獄主答言、因前世時、剝奪人衣、使諸善人、凍餒而死、今日果報、只得忍受。又復前行、見

一黑暗地獄、有諸罪人、在黑暗中、終年竟歲、不識三光、驚惶亂走、要出無門。目連悲問、此獄罪人、前作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、於暗僻處、殺諸生命、偷背官税、不令人見、今日果報、只得忍受。又復前行、見一耕舌地獄、牛頭獄卒、手執鐵鉤、擘罪人口、拔出其舌、以牛耕之、苦痛難説。目連悲問、此獄罪人、宿作何業、今受此苦。獄主答言、因前世時、妄言綺語、惡口兩舌、傳述(遞)彼此、令人鬥爭、兩家不和、今日果報、只得忍受。又復前行、見一斬剉地獄、有多罪人、項中出血、身首分離、業風吹活、而復斬之。目連悲問、此獄罪人、前作何罪、今受此苦。獄主答言、昔作魁儈、歡喜殺人、今日果報、只得忍受。又復前行、見諸餓鬼、頭大如簸、腹寬似甕、咽喉如針、長不得食、行步之時、骨節有聲、口吐火燄、形狀醜惡。目連問言、汝等前身、作何罪業、今報如此。餓鬼答言、我等前世、慳貪不捨、閉門獨食、饑餓爺娘、不敬三寶、以是因緣、果獲斯報。又復前行、見一大地獄、墻壁高厚、鐵網交加、羅覆其上、有四銅狗、口常火出、炎燄燒空、從爾叫喚、無出應者。目連即回佛所、右繞三匝、而白佛言、此大地獄、叫不能開、不知何緣、願佛開示。爾時世尊、語目連言、執我錫杖、披我袈裟、掌我鉢盂(盂)、至獄門前、振錫三聲、獄門自開、關鎖自落。目連奉敕、還至獄門、振錫三聲、獄門自開、撞入獄中。獄卒推云、師是何人、擅開此獄、此門長劫不開。目連問言、罪人從何而入。獄主答言、五逆之人、不孝二親、不敬三寶、謗毀正法、不知罪福、不明因果、造諸惡業、命終之後、業風吹來、倒懸而下、師何到此。目連答言、特來尋母。獄主問師、誰言師母在此。目連答言、釋迦世尊、言母在此。獄主又問、釋迦世尊、是師何親。目連答言、是我本師和尚。獄主問師、娘何姓何名、與師檢簿尋討。目連語之、王舍城中、傅相長者妻、青提夫人、姓劉第四。獄主即喚、王舍城中、青提夫人、姓劉第四。獄主即(再)喚、王舍城中、青提夫人、姓劉第四、獄門之前、有出家兒、大目犍連、是佛弟子、神通第一、不可思議、果是汝兒、汝當出獄。青提夫人、不敢應之。又喚青提、汝何不應。青提應曰、恐移別處、是故不應、我有一子、不名目連、亦弗出家。獄主報師、夫人言子、不曾出家、不名目連。目連謂言、信娘不識、父母在日、我名羅卜、亦未出家、父母亡後、我方出家、蒙佛改名、大目犍連。獄主再入、向夫人言、門前覓者、便是羅卜、是汝親子。夫人回説、若是羅卜、是家親子、願卿放我、與子相見。

爾時獄主、遂持刀杖圍繞、送出青提夫人、與兒相見。目連見母、苦惱如是、大叫阿娘、言在生日、香花飲食、供佛飯僧、一皆如法、死合生天、如何今者、卻在地獄。娘告兒言、我在生日、不敬三寶、不信因果、妄稱設齋、惟造惡業、死墮地獄、受無量苦、長劫不見、我兒面目。今朝何幸、地獄門前、與汝相見。我在獄中、饑吞鐵丸、渴飲洋銅、苦不可言。母子相見、語尚未了、獄主告師、不可與娘、久停説話、若更留戀、我將鐵叉、望心插起、還歸地獄。娘被獄主、驅入獄中、回首喚言、我兒佛

子、我苦難忍、百般作計、救取阿娘。目連左足門內、右足門外、聞我苦聲、將頭磕柱、血流狼籍(藉)、泣告獄主、放我入獄、代娘受苦。獄主告師、娘罪廣大、自作自受、事不相干、要娘出獄、無非告佛。目連聞已、復詣佛所、而白佛言、娘受獄苦、於子何安、世尊慈悲、方便救脫。佛語目連、汝且寬心、我救汝娘、不得出時、我甘入獄、代受其苦。爾時世尊、領諸徒衆、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、天龍八部、前後圍繞、虛空散花、高七多羅樹、即放眉間、五色毫光、照破地獄、刀山劍樹、化成寶林、鐵床化爲寶座、鑊湯化作蓮池。爾時、閻羅天子、讚言善哉、我今何幸、親見世尊、恭敬禮拜、敕諸獄卒、皆放罪人、託生善道。目連問佛、娘生何道。佛言、汝母在生、罪根深重、業障未盡、出大地獄、移入黑暗地獄、目連將飯一鉢、去獄飼母。母見飯來、貪心不改、左手接飯、右手遮人、飯將入口、化成火炭。目連問佛、如何得離、黑暗地獄。佛言、要母出獄、請諸菩薩、轉大乘經。目連奉教、母得出獄。又問今生何道。佛言生餓鬼道。目連又問、娘在獄久、今欲領娘、往恆河邊、飲水洗腹。佛言、諸佛飲水、猶如乳酪、衆僧飲水、猶如甘露、善人飲水、能解饑渴、汝娘飲水、變爲猛火、流入腹中、肚腸俱爛。目連問佛、如何得脫、餓鬼之身。佛言、汝母罪重、汝雖孝順、感動天地、非汝一人、力所奈何、乃至天地神祇、外道天魔、四天王等、亦無奈何、須仗十方、衆僧威神之力、乃可得脫、我今當說、救濟之法、使諸厄者、皆得離苦。佛告目連、七月十五日、佛歡喜日、僧自恣時、當爲現在父母、乃至過去、七世父母、厄難中者、用辨香油錠燭、床敷臥具、汲灌盆器、百味珍饈、珍奇雜果、盡世甘美、安著盂蘭盆中、剜肉然點、四十九燈、造立神幡、供養三寶、普供十方、大德衆僧。當此之日、一切聖衆、或在山間入定、或於樹下經行、得四道果、具六神通、或十地菩薩、聲聞緣覺、權現比丘、在大衆中、皆同一心、受鉢和羅飯、具清淨戒、道德廣大、若能供養、此等僧者、現世父母、六親眷屬、三途苦中、即得解脫、衣食自然、現在父母、福樂百年、七世父母、生天受樂。爾時佛敕、十方衆僧、當受食時、先供佛前、乃至塔寺佛前、當爲施主咒願、過現父母、心明禪定、離苦得樂、咒願已訖、然後受食。目連比丘、及諸菩薩、皆大歡喜。目連哀聲、釋然滅除。時目連母、得脫餓鬼之苦、托生忉利天宮、受諸快樂。目連復白佛言、我所生母、得蒙佛力、衆僧威德力故、已獲生天、若現在未來弟子、亦應奉修盂蘭盆供、報度慈親、事可行否。佛言善哉、我正欲說、汝今復問、善男子、若比丘比丘尼、國王太子、大臣官長、及諸庶民、行慈孝者、皆當奉爲、現在父母、過去七世父母、於七月十五、佛歡喜日、僧自恣時、營修淨供、百味飲食、雜果珍饈、安盂蘭盆內、施佛及僧、願使現在父母、壽命百年、無諸病苦、安樂無憂、過去七世父母、離三塗苦、生人天中、受勝妙樂、若佛弟子、及末世衆生、修孝順者、皆當效之。每年七月十五日、當爲過現父母、修設盂蘭盆、供佛及僧、以報父母、養育劬勞。末世衆生、及佛弟子、應當信受。時目連尊者、四輩弟子、歡喜奉行。